
Cantarus -remake version-

syentos

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cantarus a - remake version -

【Nコード】

N0320Y

【作者名】

syentos

【あらすじ】

いじめを受け続けていた引つ込み思案な少女は、ある朝突然別世界へと飛ばされる。そこで出会った友達、先生、そしてなぜか少女を知っているような目で見える王子……。

元々は別のサイトで独自に公開していたものですが、あらためてremake versionとしてここに書き残したいと思います。応援よろしくお願いします。

始まりの朝

二十世紀初頭の七月、日本の東京はすがすがしい朝を迎えていた。

夏の始まりを告げる風が運んだ、生ぬるい空気に背中を押されて一人の少女は、学校へと向かっていた。

少女は肩まで伸びたつやのある黒髪を持ち、ゆったりとした純白のワンピースを着ていたが、特に目立つことはなく、腰についた小さなフリルだけが彼女を飾り付けていた。

少女は学校に着くと、下駄箱で薄汚れた黒い靴を脱ぎ、沢渡 陽花と書かれた名札が張り付けられた靴箱に入れた。予鈴が鳴り、他の生徒も次々と走って教室へと向かって行く。乱暴に靴箱を閉めると、その中に紛れてやや急ぎ気味に歩いて行った。

廊下を歩いていた陽花は、妙な寂しさと恥ずかしさを覚えた。

周りの生徒たちが、陽花を動物園の檻に入れられた生き物を見物でもするかのようにじろじろと見ていたのだ。 陽花の歩く一歩手前をわざとらしくよけてみたりして、友達と笑い合っている。

教室は長い廊下の奥にあるせいもあり、たどり着くまでが長く感じられた。

歩くことだけに集中し、何も聞かないように歩を進めていくと、1-Dと書かれた教室が見えた。陽花のいる教室だ。

ドアの前で立ち止まって、ふう、とため込んだ息を吐ききってもう一度すいなおしてから、カラカラ、とできるだけ音をたてないように教室に入る。一瞬その音に気付いた数名の生徒がこちらを向くが、毒虫を見るような目つきで陽花を睨むと、すぐにもとの会話に戻ってしまう。だが陽花はそれにひるむことなく、自分の席に着く。机には放課後の美術の補習の時にでも描いたのだろう、嘲笑う声が聞こえてきそうなくらい嫌な言葉が 赤や黒でべたべたと

投げつけられていた。

陽花はそれをしばらくじっと見つめて唇をかむが、やはりそれも平気な顔を取り繕ってやり過ごす。

汚れた鞆から分厚い本を取り出し、元の色がわからないくらい薄れた葉を抜いた。

その本はすでに黄ばんでいて、文字もところどころかすれているが、

陽花はそんなことなど気にも留めていないようだった。

ひたすら作業のように字面を追っていると、窓から零れ落ちる陽だまりのせいだろうか、

なぜか今日はとうとうと、眠気に襲われた。

ホームルームまで、まだ時間はある。少し寝ようかな。

本を枕代わりにして、陽花はすう、と小さな寝息を立てて、眠りについた。

新世界（前書き）

はじめまして、syentossです。Cantarusを読んで
いただいております。この物語は1年前の、また文章
が拙い内に書き上げたもので、すでに完結はしていました。皆さん
に読んでもらいたいと思ってremake version（リメ
イクというほど変わってはいないのですが、）としてここに書いて
いきたいと思えます。できるだけ昔のままにしておきたいと思っ
ているので、文章は下手ですが、お楽しみください。

新世界

人々の歩く足音に、ふと陽花は目を覚ました。

ぼんやりとまだ霞んでいる視界の中、自分の座っていた場所を見て一瞬気を失いそうになるほど驚いた。

「え……？」

が、それも無理はなかった。陽花の座っている場所は教室でも家でも電車の中でもなく、賑やかな商店街の路地裏だったからだ。地べたに座り込んだまま周りを見渡すと、商店街とは反対の方、その道の端に光が見えた。陽花は必死に崩れ落ちそうになる足を支えて一人薄暗い影に隠れるようにして、その光に向かってこっそりと歩いていった。

人ひとり通れるか、そんな細い道を抜ける。と、そこにはさつきまでの人通りが嘘のような、静かで広大な街の光景があった。赤い屋根のレンガ造りの家が並んでいて、遠くには川と山、水平線まで続く青い空が陽花を出迎えた。その景色の美しさに思わず見とれてみると、上からヒュツ、ヒュツ、と何かが風を切る音が聞こえた。

なんだろう、鳥……？ そう思って空を見上げると、そこには大きな生き物と共に人が二人、空中を飛びまわっているのが見えた。耳を澄ますと、さつきまでは全く聞こえなかった二人の話し声が聞こえてくる。

「だから、お前速過ぎだつて！ そいつ使うの、ずるいだろ！」

一人は、怒っていた。

「俺の一角炎獣リトルディンガーをなめんなって言ったただろうが！」

一人は、笑っていた。

「くそつ、魔術師マジシャンまであと一歩だつてのに……」

一人は、何かを悔しがるように。

「お前もそいつ使いこなせれば、すぐに受かるさ。」

どのみちあと一年で卒業なんだ、さつさと階級あげちまえ！」

一人は、それを励まして。

「わかつてるよ！　すぐにお前なんか抜いてやっからな！」

二人はただ楽しそうで、　その中に吸い込まれるように陽花は自然と足を踏み出していた。

「お？」

明るみに出た陽花の姿を、一人に気づかれた。

その人は、鋭い炎のような赤い目と緋色の角、体中にライオンの鬣のような黄色い毛の生えた鳥を操り、陽花のそばに舞い降りた。

「ねえ、ここで何してるの、お嬢さん？」

陽花に話しかけてきた、その人は少し乱れた赤い髪に、長い黒のズボンに着崩した白のYシャツ、首には2つのネックレスを身に付けている青年だった。鋭く、しかし優しさのある赤い瞳が陽花をじっと見つめていた。

陽花は初めて聞いた、お嬢さんなんて言葉になんとか恥ずかしくなつて、

「ええと……その……」

口をこもらせてうつむいてしまう。

その間に、勝手にその人は自己紹介を始めてしまった。

「あ、俺はカズラス・ユレク。皆にはカズって呼ばれてる。

んで、後ろのがオルト・アーサー。君の名前、教えてよ？」

しゃべるたびに不用意にカズが近づいてくるので、陽花は思わず

ドキツとして真っ赤になって一歩後ずさってしまった。

その様子にかズが困ったような顔を浮かべかけ、オルトと呼ばれた茶髪に隠れた青い瞳で陽花をにらんだ、背の小さな男は若干あきれたような表情を見せた。

「さわたり……ようか、です」

「ふうん」

適当にかズが相槌を打ち、何か言おうと口を開き始めると、後ろで

ずっと黙っていたオルトがカズを横に押しやるようにして前に出てきた。

「おい、お前さ、この国の人間じゃないだろ？ 黒髪の女なんて初めて見たぜ」

偉そうにズボンに手をつつこんだままのオルトが陽花がまるで事件の犯人だともいっようなように責めたが、陽花は意味が分からない、といった顔をして困る以外、何もできなかった。カズはオルトを隠すように手で後ろへ押しして、

「落ち着けての。意図的に入ったわけじゃなさそうだし、そんなに責める必要はないよ。」

陽花だって、困ってるだろ？」

どうしたんだい、と聞くカズに、

「っあの、私は、さっきまで学校にいたのに、気が付いたらここにいて……。」

この世界が一体どこで、あなたたちがどういう人なのかも知らないんです」

陽花のおびえたような表情を見て、カズは、大丈夫とでもいっようなに微笑み返した。

「うーん、迷い込んだ子猫ちゃんを見捨てるわけにはいかないからなあ。」

仕方ないね、君が元の世界に戻るまで俺が面倒みてあげるよ」

「え……。っでも迷惑じゃ……。」

「いーのいーの、俺の家、ホテルやって部屋余ってるし、女の子一人くらい、余裕で泊められるから大丈夫！」

自信満々に親指を立てて笑うカズに、オルトは、

「いいのかよ、ナンパみてえなことして、また怒られるぜ？」

呆れた顔で忠告した。しかし、そんなことは全くカズの耳には入っていない。

「っようし、きまりい！」

と、カズは一人で子供のようにはしゃいでいる。

それにつられて、陽花も、ふっ、と小さな笑みを見せた。

魔法世界「ドウオザルド」(前書き)

第3話目、アップしましたのでぜひ読んでください！ 感想を書いてもらえると励みになります。あと、もうひとつ「Brain Installer」のほつも読んでもらえるとうれしいです！

魔法世界「ドウオザルド」

人間が生まれたその時から、すでに世界は二つへ分裂していた。神の力を与えられた、魔法世界「ドウオザルド」。

力を持たない種族の住む、地球と呼ばれる世界。

双方ともに、決して互いの姿を知ることなく、決して名を聞くこともなく、決して誰も干渉することもなかった。

しかしある時、一人の天才魔術師は、その境界を超えることに成功した。

だがその成果は、王家の者のみに魔術秘話として口頭で伝えられ、外へ広まることはなかった。

なぜならば、そのうわさが外へ広がることは、二つの世界が共存してきたその無知という理由を打ち壊し、世界を破滅させてしまう可能性があったからだ。

魔術師は魔法を使えるが、人間は使うことはできない。

その力の差は、どんな者にも優越感を与えてしまうのだから。

そしてそんな魔法世界の中に十歳という若さで王の位についたハルクス・イルドという王がいた。

彼もまた、千年に一人と言われるほどの天才魔術師であった。

隣に立つ者は一人としておらず、その若さ、顔だちもよく頭脳明晰で性格もよし……全て完璧だ、そう言われていた。

それ故に婚約者はこの世で最も美しい女性を、王家は求めていた。

そう、彼に見合う、全てが完璧な……

太陽が沈みかけた頃、カズと陽花、オルトの三人はユレク一家の経

営するホテルにたどり着いた。

ホテルと言っても5階建ての小さな家を改装して作られたものよ
うで、見たところ周辺にある家と変わったところはない。ロビーは
花形のランプの置かれた受付の机が一つあるだけの質素な造りだっ
たが、奥のエレベーターのある場所へ行くと、隅々まで手入れのさ
れている廊下が輝いていた。

カズは受付にいた両親に事情を伝えて、エレベーターへと案内しな
がら陽花の話聞いていた。

「なるほど。地球なんてのは僕らは一切聞いたことがないけれど…
…良いところなんだね」

そう言つて部屋のキーを受け取ると、カズはそつと陽花の手を取り、
「君の世界については少しわかった。じゃあ今度はこっちの番だ。

部屋に入つて。教えてあげるよ」

「ありがとう」

初対面なのにまるで友達か家族のように話しかけてくれるカズに、
陽花は少しだけ安心していった。

カズは部屋の前に立ち、慣れた手つきでキーを差し込んでドアを開
ける。

部屋の中は陽花一人ではすこしもつたないくらいの広さで、透明
なテーブル、それをはさむように置かれたベージュのソファ。そ
の奥には、香りの強そうな花の鉢植えが置かれたベランダがあった。
灯りをつけ、陽花をソファへ座らせて、カズもその隣に座る。オ
ルトは二人の向かい側のソファに座つて、テーブルの下にあった
お菓子を食べ始めた。

「ここは魔法世界のドウオザルドって呼ばれている。そしてここは
最も経済が盛んで世界の中心となる国、セントリアっていうんだ。

リアル、エイツという他の国に比べて裕福な人が多いんだよ。

……まあそれはいいとして、この世界は全て魔力で成り立っている
クレスト

んだけどね、これがなければ人は魔法を使うことはできない。そして僕らはソリスト学院の生徒なんだ。今度学校に案内してあげるよ」

カズは爪の先に火を灯して、空中に絵を描きながら説明した。陽花は空気の中で踊る火に魅入って、自分でも気がつかないほど自然に笑いながらそれを聞いていた。

「私がいたところには魔法なんて夢の世界だったの。本当にあるなんて信じられない」

カズはそれを見て、そうかい、と笑いながら立ち上がる。

「じゃあ、君が元の世界に帰るまで楽しんでいくといい。そろそろ夕食の時間だし、また明日にでも街を案内するよ。今日は疲れただろっ」

ドアノブに手をかけ、カズは陽花の方を振り返って小さく手を振った。オルトの方はちらりと陽花を見ただけで何も言わなかった。

「うん、ありがとう」

陽花は部屋を出て行く二人に、その姿が見えなくなるまで手を振り返っていた。

「カズ」

たった今出たばかりの部屋のドアを背にしたオルトは立ち止って、逃げるように歩いていくカズを引き止めた。

「お前、あいつをどうするつもりなんだ。今日のお前、なんか変だぜ？」

街中で、しかもあんなどこから来たのかもわからねえような黒髪の奴を……」

「いいんだよ」

焦りかけたオルトを、カズは声だけで制した。

「いいんだ。あれは……彼女は、俺の罪だから。最後にやらなきゃ

いけない、大切なことなんだ」

オルトは、カズの手が小さく震えていることに気が付いた。

「どういう意味だよ。何を言っているんだ」

しばらくの沈黙。どちらも動かなかつた。一つの物音も立てることなく、ただ立っていた。スローモーションのようなろい動きで振り返ると、カズは口の端を少し持ち上げて言った。

「そう責めないでくれ。……でも、かわいいだろう？ あの娘には黒髪が一番似合ってるよ」

夕食後、陽花は木と硫黄の匂いが染みついた広い浴場に入っていた。

すでに日は落ちていて、夜の空気は陽花の体を冷やしていた。

「はあ〜」

ちようどよく暖められたお湯が、じわじわと陽花を温めていく。

ふと、奥のほうに視線をやると、

自分の他にもう一人、20代くらいの女性がいた。

「あら？」

ゆるいウェーブのかかった短めの深い青の髪と、それに混ざるような細く小さめの金色の瞳をもった人だった。

「あなた、見かけない人だけど、学生さん？ いつからここに来たの？」

その人は、陽花のそばに寄ってきて、話しかけてきた。

彼女の綺麗さに少し見とれて、ほほ笑みながら陽花は答える。

「今日ここに……カズラスっていう人に泊めてもらえることになつて……」

「カズラスが？ ガールフレンドとかじゃなくて？」

目を丸くして驚いたように言う彼女の言葉に、カズのガールフレン

ドって一体どんな人なんだろうと思いつながら陽花は抗弁した。

「ち、違います。決してそんなんじゃないんで、今日初めて会っただけで……」

「そう……でもカズラスを好きになるのだけはやめておきなさい。私も長いことここにお世話になってるし、カズラスが小さい時から住んでるけど、何度もいるんな

彼女を連れてきては1か月もたたないうちに別れるのよ。やっぱり噂はきついのかしらねえ……」

陽花は首をかしげて言うミアラの言葉が、少し気になった。

「うわさ？」

「ええ。カズラスは天才でしょ。その彼女の噂なんて、広まるのに一日もかからないわよ」

「天才……って、そんなにすごい人なんですか？」

「知らないの？ 卒業までにマジシャンまでたどり着ける人なんてそうそういないわよ。」

千年に一人の天才魔術師。カズラスなら有望だっつてずっと騒がれてるわ。

そんなことも知らないなんて……」

「っでも、私、この世界の人じゃないんです。本当に何も知らなくて……」

「どういう意味？ この世界の人じゃないって……あなた、どうやってここに来たの？」

「わからないんです。気づいたらここにいて……」

わなわなと身振り手振りひたすら説明しようと陽花が頑張っているのを両手でそっと抑えると、

赤子をあやすように陽花の頭をとんとんと軽くたたく。

「そう、まあいいわ。そうね、今日の夜、空いてるのなら、十時に三階の右奥の部屋にいらっしやい。カズラスが何も言っていないのなら、

私が教えてさしあげましょう。教師の腕を見せてあげるわよ」

「いいんですか？」

陽花は思わず乗り出そうとして床をすべりそうになって、慌てて足踏みをしてごまかした。

くす、とミアラは鼻で笑い、目を細める。

「ええ、それと、私のことはミアラって呼んで頂戴。本名はミアラ・ロンドンシャン。よろしく」

「私は沢渡 陽花って言うんです。よろしくお願いします」

教師、ミアラ・ロンデシヤン（前書き）

まだまだ頑張ります！応援よろしくお願いします！

教師、ミアラ・ロンデシャン

薄暗い廊下にはとどころに備え付けられたランプ以外にほとんど灯りはなかったが、代わりに月明かりが差し込んでいた。

陽花は夜十時きっかりに、浴場でミアラに教えられた部屋へとたどり着いた。

ミアラはソリスト学院……カズが通っているという学校の教師だと言っていた。中でも優秀なクラスを教えているらしく、ミアラ先生もカズが見せてくれたようなすごい魔法を見せてくれるかもしれない、と陽花は胸を躍らせながら扉を叩くと、コツコツと部屋からこもった足音が聞こえた。
ゆっくりとドアが開く。

慌てて陽花が背筋をただと、中からミアラが笑顔で陽花を迎えた。

「いらっしやい。コーヒーとクッキーも用意できてるわ」

「どうぞ。遠慮せずに食べて」

ミアラは陽花がソファに座ると、すぐにコーヒーとクッキーの入ったかごを陽花に差し出した。

陽花は軽く頭を下げ、コーヒーカップに口をつける。

「あつたかい……」

ほんのりと甘い香りは、一日中気を張って疲れた陽花の体にじわじわとその暖かさが広がってくる。

「気に入ってくれてうれしいわ。落ち着いたらあなたのこと、もっと詳しく話してくれる？」

「……はい」

トン、と陽花はコーヒーカップをテーブルに置き、少し間をおいてから口を開いた。

「私……多分ミアラ先生は知らないと思うけれど、日本っていうところから来ました。気が付いたらここにいて……びっくりして外に出たら、カズに声をかけられたんです」

「日本？ 聞いたことないわ。それに黒髪の子……初めて見たわ。この国じゃ、黒髪は悪魔の象徴なのよ」

ミアラは棚の中を探りながらそう言った。ごそごそと奥から木の箱を取り出し、その中の桃色のプレスレットを掴んで陽花に渡した。それは一つ一つの粒がきれいにそろっていて、真珠のように透き通り、ダイヤモンドのように輝いていた。

「悪魔……」

「ええ。あなたはそうじゃないみたいだね。これを持っていなさい。魔法がかかっているから、これがあればあなたの黒髪には誰も気がつかないはずよ。ただ……」

「？」

「魔力の強い魔法使いには気を付けて。気がつかれてしまうかもしれないわ。正体がばれるだけならいいけれど、その魔法が解除されれば終わりよ。用心することね」

「っそ、その強い魔法使いが誰か、見分ける方法とかはないんですか？」

「魔力のないあなたでは無理ね。でも、あなたには私やカズラスがいるから、安心なさい。それに私たちより強い魔法使いは、そうね、この国の王子くらいだからきつと大丈夫よ」

「王子様がいますか？」

陽花が驚いて身を乗り出しかけたが、すぐに腰を下ろした。

「当り前よ。ここは島でも何でも無い、王国だもの。あなたのいた日本にはいなかったの？」

「はい。その代わり、総理大臣っていう偉い人がいますから」

王子様がいるなんて夢みたいだ、と陽花はクッキーを食べながらそ

う思った。

「ソウリ・ダイジン？ 珍しい名前の人ね。……まあいいわ、とりあえず今日は、魔法使いの階級について教えてあげる」

「階級？ レベルってことですか？」

「そうよ。私たちの世界では、魔法使いは力の強さで5段階に分けられているの。ソリスト学院を卒業するまでに得た階級で、その魔法使いの就職先や待遇が決まってくるの。階級はね、

- | | | |
|---|----------|--------------|
| 1 | Vanit | ヴァニット |
| 2 | Mirror | 見習い(ミラー) |
| 3 | Tricker | トリッカー
使者 |
| 4 | Sorcerer | ソーサラー
魔導師 |
| 5 | Wizard | ウィザード
魔術師 |

こんな風になっていて、ウィザードが一番強いよ。ちなみに私は^{ソーサラー}魔導師、王子様は^{ウィザード}魔術師よ」

「っじゃあミアラ先生はすごい人なんですね。魔導師なんて、とても強そう。王子様はもっと強そうだけど」

くす、とまた鼻で笑って、ミアラは陽花の頭をなでてほほ笑んだ。部屋の中に漂う花の香りに、陽花も少しだけ笑っていた。

「ミアラ先生が？」

翌朝、陽花は眠い目をこすりながらカズの元へ行った。

「うん。この世界についていろいろなことを話してくれたの。

それとね、この夏休みが終わるまでに学校に通えるように手配してくれるって。

ここにいるうちはほかの生徒と同じようにふるまいなさい、って言

つてたの」

陽花の服はワンピースではなく、昨夜ミアラが用意した、紺色の飾り気のないチュニックに変わっていた。

「そうだね。それならよかった。ミアラ先生は切実な人だから、安心していいよ。実際俺が慕ってるのはあの先生くらいだし」
と、カズはいたずらっぽく笑って言った。

黒マントを羽織ってプレスレットを隠した陽花に、行くよ、と言ってホテルの門を開けた。

ギギギギ……と、開けたのが夜だったら恐怖の館などという名前がつきそうな音を出して鉄の門が開く。

「二学期まであと一週間しかないけど、困らないようにいろいろ教えるよ」

「うん。ありがとう」

朝日に照らされてすこし眩しい道を、二人はゆっくりと歩いていった。

セントリアは、中心部にある膨大な敷地を持つソリスト学院を境に、東西二つの街に分かれている。

東にはカズたちの住む繁華街のあるルステイ、西には貴族の多くが住む城下町サスピア。

二つの街は全くと言っていい程、雰囲気が違っていた。

ルステイでは、低階級でソリスト学院を卒業した商人が、毎日大声を張り上げて店に客を呼び込む姿が多くみられる街だ。人通りも多く、時折明るめの音楽がどこからか流れて人々の活気をさらに盛り上げている。

一方、サスピアではほとんど人は見えない。ちらちらと高級なスーツやドレスを黒マントに隠して歩く貴族が現れるだけだ。一日中音

はなく、耳をすませば離れたルステイの繁華街の賑やかな声が聞こえるほどだ。ここに住むのは貴族か、魔導士メイサラー以上の魔法使いだけだ。だが、強い魔導士などはそうそうおらず、そのために住宅地のほとんどは貴族ばかりだった。空気はピンと張りつめていて、低階級の者が気安く通れるような場所ではなかった。

「うわあ……」

セントリアの中心部に位置するルステイ繁華街の美しさと賑やかさに、陽花は心を躍らせていた。

ところどころに虹色の光が漂い、レンガの壁は隙間に宝石などがちりばめられていて輝いていた。

人通りは多く、昼間にもかかわらず祭りのような熱気にあふれている。

「こんなすごいとこ来たの初めて！」

店の煙突からは、キラキラとした何かを含んだ白い煙が出ていて、その下では虹色の飴の職人や魔法の絡繰り人形、あつという間に育つ花を売る商売人が楽しそうに働いている。空中には花束を付けた風船がふわふわと漂い、そのそばを小鳥が飛びながら歌を歌っていた。歩いているうちに、不安をかき消すような楽しさに足はいつの間にか早足になっていて、カズもそんな陽花の様子に笑いかけながらついていった。

「すごい！と叫びながら振り返った陽花に、カズが、

「何か欲しいものがあるなら言つてよ。買ってあげるからさ」

と言つと、陽花は頬を赤らめて、

「あ、ありがとう！」

両手を握ったまま喜んだ。

一角炎獣、リトルデインガー（前書き）

やっと第5話リメイク完了です！

一角炎獣、リトルディングー

ほんの百年ほど前、まだそれほどの賑わいを持たなかったルスティの繁華街の外れに、一人の占い師がいた。薄汚れた髭と、錆色のマントを身に着けた老人が、怪しい看板が地味につりさげられているだけの古い小さな店に幽霊のように住み込んでいた。

当然、客は来なかった。誰に知られることも、言い伝えられることもなかった。

老人は気力を失ったようにカーテンの隙間から窓の外を眺めているだけで、何をしようともしない。目の前に置いた紫色の水晶玉に手をかざし、時折髭に埋もれた口を開いてぶつぶつと何かを言っていることもあったが、言葉に詰まるとやはり口を閉ざしてしまふ。

真夜中の十二時に柱時計の鐘が鳴ると、ゆっくりと、名残惜しげに窓を離れて台所へと向かう。身長のは半分はあるだろう長いお玉を取り、巨大な鍋の中のドロドロとした液体をすくって一口飲むと、また窓へと歩いて行った。足取りは重く、マントの裾は引きずられてポロポロになっていた。窓際にあつた錆びたイスに座ると、マントを体を丸めて被る。数秒たたない内に寝息が部屋の中へと響き始めた。

ふと、老人の耳に扉の音が入ってきた。ほんの少し戸を開けると、黒マントを羽織った一人の男が立っている。その男は長い黒髪を時々鬱陶しそうにしながら、

「こんばんは。この国の唯一の占い師だと聞いてきたんだが、あんたがそうか？」

老人はその言葉を聞くと、今まで細めていた目をゆっくりと開けて気味の悪い笑みを浮かべた。

男は老人の返事も待たずに戸を無理やり開けて中へずかずかと入っていく。

ポロポロになつた机の上にガチャリと金貨で溢れた布袋を置き、

「この国と私の子孫の未来を占つて欲しいんだが」と言った。

老人は窓際へと向かい、窓にぽつんと置き去りにされていた水晶玉に手をかざす。数秒か数分か、二人の間に妙な緊迫感と沈黙が漂う。いい加減待ちきれなくなつた男が口を開こうとすると、それを断ち切るように、

「百年後にはこの国は最後には幸福に包まれるさ。お前さんの心配には及ばぬ」

しわがれて聞き取りづらい、低めの声で老人は言った。

男は一瞬顔をしかめて、なるほど、という顔をしていたが、次に来るであろう言葉に期待を込めて待っていた。が、何分たつても老人の口は開かない。気味の悪い笑みを口の端に浮かべて男を見つめていただけだつた。

「もう一つの質問に答えてくれないか？ 私の子と孫の運命が知りたいんだ」

「死ぬ前に知りたい……か。幸せに生きているのかどうかを」

布袋に手を置いて老人を睨んでいた男は、老人の言葉に目を見開いた。

「なんだ、その程度で驚くことかい。わしは占い師だ。占い師と言うより預言者、と言つても良いがの。お前の未来なんぞ、もうとつくに見えておるわ」

「なら、教えてくれないか？ もう見えているんだらう、私の子らの未来が」

老人は、今度は優しさを含んだ笑いで、

「それは無理じゃな」

そう答えて、笑い始めた。

「何故？」

男はそばにあつた机に手を力いっぱい打ち付け怒つたが、老人は笑いを増すだけだつた。やがて男が落ち着いたのを見て、老人は言う。

「何故か？ そんなことを聞く必要がどこにある？ ……お主はその答えを、知りたくはないのだろうか？」

街を照らし続けていた真夏の太陽が下がり始めてきた頃、陽花とカズはルステイ繁華街から少し離れた住宅街を歩いていた。時折吹くさわやかな風の音が聞こえるほどの静けさが、目的もなく歩き続ける二人の周りにあつた。陽花はミアラにもらつたブレスレットと、カズに買ってもらつた踊り続けている魔法の妖精が入つた小瓶を嬉しそうに眺めながら、そしてカズはそんな陽花を見ながら、二人は並んで、無言で坂道を上る。

上にも下にもレンガ造りの家が青々とした木を隙間に埋めて並んでいるこの坂道の、ちょうど頂にたどり着くと、カズは立ち止まって空を見上げながら言った。

「陽花はさ……魔法を使えないってことは、空も飛んだことないんだよな？」

「う、うん。飛行機くらいでしか、飛んだことないの」
陽花はおどおどと答えると、

「ヒコウキ？ そんな名前の物があるのか」

「そつだよ。うーんとね、羽根がついてて、鳥みたいな形をしているの。」

その中に入って飛ぶの。魔法使いみたいにそのままでは飛べないけど」

陽花の説明に頭をひねっていたカズは、やがて何かを思いついたように、近くのガードレールに手をついた。

「そつか。……空、飛んでみたい？」

魔法瓶を両手で包んで、大きくうなずく陽花に、

「じゃあ」

カズは手を差し出した。

とまどいながらも、そっと陽花は手を乗せた。その瞬間、二人の体が重力がなくなつたかのようにふわりと浮く。地面がなくなつて一瞬陽花はびくつと肩を震わせた。

「っわわ」

「大丈夫。落ちないから大丈夫」

「ちよつと、怖い」

「下じゃなくて遠くを見て。ほら、きれいだよ」

陽花はカズの腕にしがみつくと、恐る恐る顔を上げて遠くの方を見た。

「うわぁ……」

二人の遥か下、赤いレンガ造りの屋根がずらりと並んでいる。地平線のほうまで見えるそれらは、まるで一つの生き物のようにそこに在った。

「きれい」

「だろ？」

カズは地平線を眺めながら、

「リトルデインガー
一角炎獣」

と呟くと、に二人の足元に獣が現れた。

「これ、昨日の……」

カズが笑いながらトントン、とリズムを刻むように足で背中を叩くと、リトルデインガーはドラゴンのような硬い筋の通つた赤い羽根を大きく広げて空中を飛んだ。二人の髪がなびき、風に包まれていく。ひんやりとした雲も、二人の間をすると去っていった。

「僕ら魔法使いには5つの階級があるんだ。そしてそれとは別に2つの覚醒つてのがあるんだよ。覚醒すれば階級に関係なく強くなれるんだ」

「覚醒？」

群れになつた白い鳥が、二つに分かれて二人の周りを飛び去ってい

く。陽花はその光景に目を奪われた。

「この一角炎獣は使者リトルデインガーつていつて、第一覚醒メサケで使えるようになる召喚魔法で呼び出したんだ。第一覚醒アリユエストだけでもこのほかに強い魔法が使えるようになるんだけどね」

「2つ目の方が強いんだね」

「そう。第二覚醒カルミアの方がもつとすごい魔法を使えるんだけど……まだ僕は覚醒できてないからね。もしできたら陽花に一番に見せてあげよ」

カズが苦笑いをして言うと、陽花は小さくガツポーズをして、

「本当？ やった！」

それから両腕を広げて、目を閉じながら陽花はつぶやいた。

「ずっと……こんな風に飛べたらいいな」

そつと抱きしめるようにカズは陽花の肩に手をまわして、耳元でささやく。

「また一緒に飛ぼう。約束する」

「うん」

カズはもう一度陽花を支えていた腕に力を入れると、足でトン、とリトルデインガーの背中を叩く。

溢れる空気を角と羽根で押しつけて、急降下する。赤い屋根のカズのホテルが、小さく真下に見えた。

一角炎獣、リトルデインガー（後書き）

明日もう1話アップできたら、と思います
今日はこれでグッナイ！

チエルサ（前書き）

やっと更新できました！次は日曜日になってしまいそうですが、頑張ります！

チエルサ

魔法国セントリアの王家は、天才魔術師であり王子であるハルクス・イルドの姫君としてある一人の女性を迎えた。彼にふさわしい完璧な存在だと幼少期からうわさをされていたその女性の名は、ラフィーネ・デイ・スフォルツァ。

絵画に描かれた天女のような美しい容姿を持ちながら、心は厚い、理想の女性だった。

王家も、民衆も皆、容姿端麗なラフィーネを出迎えることに納得していた。

たった一人、ハルクスを除いて。

ラフィーネと出会う以前から天才だ、完璧だと全ての者から言われていたハルクスはその言葉には聞き飽きて、嫌悪感をも抱いていた。彼は表向きはラフィーネを愛していたが、ほんの少しの間でも一人になった時にはぶつぶつと嫌味を吐き、ラフィーネの服を破り捨て、窓から城の前を歩く民を睨みつけていた。ただ彼は、こう思っていたのだ。

いい加減普通の人間になりたい、せめて普通の王子で良い、と。ラフィーネを抱きながら、心の奥底で必死に叫んでいた。

ハルクスは、王家の者以外の女性をたった一人しか知らなかった。過去に一度だけ、ドウオザルドの視察に出かけた際に道端で膝を抱えてしゃがみこんでいた十二、三才程度の少女と話したことがあった。話した内容はあまり覚えていなかったし、生きているかもわからない。ただ覚えているのは、その時一つだけ約束をしたことだ。なににもかもが全て完璧だった自分が求めた、不完全で小さな僕の願いを果たしてくれ、と。

だがきつと少女はそんな約束など、すぐに忘れているに違いない。もう、時間はなかった。

だから、望みは捨てようと、そう心に決めていた。

陽花がドウオザルドへ来てから10日がたった。夏休みは終わり、陽花はソリスト学院の学生としての朝を迎えた。新品の黒いボレロの制服に、慣れないつやのある革靴を履いて、カズと共に登校したところどころに錆がついた黒い門を通り、そのそばに立っていたミアラを見つけると、陽花はカズと別れ、新しい生活に胸を躍らせながら陽花はミアラの後ろについていった。

30分ほど職員室でミアラと立ち話をした後、二人が教室へ着いた時にはすでにホームルームの時間を知らせる鐘が鳴っていた。ミアラは先に教室へ入って教壇に立つと、陽花を黒板の前に立たせた。

「今日から転校してきた子よ。彼女は特別な事情があつて魔法を使うことができないけれど、普通に接してあげて頂戴」

ミアラの視線の合図を受け取った陽花は、慌てて挨拶をした。

「沢渡 陽花です。よろしくお願いします」

言い終わってすぐに、ミアラに背中を押されて、陽花はカズの隣の席に向かった。

「陽花」

席に着くと、教室のざわめきで隠れてしまつほどの小さな声でカズが笑いかけてきた。

「なんか困つたらすぐに俺にいつてくれよ」

「うん」

大丈夫、と陽花が言おうとしたその時、とんとん、と後ろから肩をたたかれた。

びくつと全身を震わせて勢いよく横を見ると、大きな赤いリボンをつけた金髪のツインテールの女生徒が、手を腰に偉そうにあてて二人を見下ろしている。

「初めまして。あなた、カズの知り合いなの？ 随分と仲が良いのね」

濃い青色の目とピンク色の頬はどこかお姫様のようだった。

「ああ。この前、坂道であった」

陽花がその女生徒を見上げて黙っていた間に、カズがさらりと答えていた。

「なにそれ？ 駆け落ちでもしてたの？」

「ち、ちげえっ」

予想外の言葉にカズは慌ててそっぽを向いて答える。

「何よ、あやしいわね。何か隠してるでしょ」

断じて違う、と必死で否定するカズと、どうにかして陽花の事を聞き出そうとねばっている女生徒がにらみ合っていると、

「カズがいつもみてえにナンパしただけだ」

二人の肩に手を置いて、オルトが間に入ってきたので、余計なこと言うな、と立ち上がったカズはオルトを下がらせようと制服を掴んで引つ張った。オルトが必死に腕を振りほどこうとしている間に、

「あ、そうだ、名前教えるの忘れてたわ。あたくしはチエルサ・エズラス」

と女生徒が陽花に手を差し出していた。

うるさい、この野郎、お前が余計なこと言うからチエルサが勘違いしかけただろ、お前のせいだ、などと言い合っている二人を親指で指を指して、

「この二人、うるさいでしょう。いつもこうなのよ」

チエルサは呆れた、と肩をすくめて言った。

「わ、私は楽しいの好きだし、平気だよ」

へへ、と小さく笑った陽花は、いつの間にか握っていた右手を開いてチエルサに差し出す。

「よろしくね、チエルサ」

「ええ。よろしく」

目を細めて、チエルサはほほ笑みながら陽花の手を握った。

「ええーっ！」

放課後、人の足音もあまり聞こえなくなってきた廊下に、甲高いチエルサの声が響いた。

「陽花、ほんとに別世界から来たの！？ ……魔法が使えないって言うからってつきり何かの病気かと思ってたけど、違うのね」

慌てて耳をふさいだオルトを殴って、陽花の肩に両手を置いた。ぐほっ、という変な声が聞こえたがチエルサは気にしないことにした。「ね、ね、そのニホン？ だっけ、もつと詳しく聞きたいわ。明後日にもピクニックに行きましょう。なんでも教えてあげるから」

う、うん、と陽花が頷くと、チエルサはカズに話しかけようと振り向

「うわっ、ミアラ先生！」

いた先に、絵の具が少しいたエプロンを着けた、片手に筆を持ったままのミアラがいた。陽花もいきなり現れたミアラに驚いて一歩後ずさった。

「チエルサ、もう少し静かになさい。カズラス、陽花、あなた達も他人にそういうことはあまり言わないこと。わかったわね？」

「わかってますって」

なんでオルトだけ怒られないんだよ、とすねたカズは、ミアラの持っている筆の周りに金色の絵の具が飛びまわっているのに気がついた。

「ミアラ先生はここで何を？」

ついてらっしゃい、とミアラは近くの教室のドアを開けた。4人がその中に入ると、薄暗い教室の中に映画のスクリーンほどの大きさの白い板が置いてあった。

「今年の祭りで使うものよ。看板のデザインを任されているの」

よく見ると、白い板の表面を虹色に光る絵の具が、華麗に交差しながら飛び交っていた。ぽかんとその美しさに立ちつくした4人を見てミアラは笑うと、筆に金色の絵の具を付けて、口の中で呪文を唱える。筆の先から絵の具が生き物のように飛び出し、あつという間に美しい曲線を描いていった。その曲線も踊るように動いて他の絵の具と交差していく。

「どうかしら？」

と自慢げにミアラは言った。

「さすがです、先生」「すごい」「神秘的ですね」「やっぱりミアラ先生は天才だわ」

4人は口々に言っつて、その後も日が暮れるまでその絵を眺め続けた。

チエルサ（後書き）

次から日曜日更新にしようかな（笑）
頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0320y/>

Cantarus -remake version-

2011年11月7日23時07分発行